

海だったなごりを伝える

所在地：東伊興 2-12-4 伊興氷川神社



渚ふちの宮みや (伊興いこう氷川ひかわ神社じんじや)

毛長川沿岸に位置する伊興氷川神社は、渚の宮と呼ばれています。地元では「ふじのみや」と濁って読んでいたそうです。

およそ6000年前、奥東京湾の海中にあった足立区が、陸地化していく過程で、この付近が最も早く陸地となり、大宮台地あたりからの移住者が、武蔵国一の宮である大宮(埼玉県さいたま市)の氷川神社かんじょうを勧請(分霊を招くこと)したものと考えられており、足立区内最古の氷川社です。この周辺は渚(水を深くたたえているところ)が入りこんでいたところから「渚の宮」と呼ばれ、区内一帯が渚江郷や渚江領などと呼ばれるようになりました。

渚の宮は、渚江領の総鎮守だったと伝わっています。江戸時代の『新編武蔵風土記』の足立郡伊興村の項には、「氷川社 当村及び竹塚、保木間三村の鎮守とす」とあります。しかし、明治5年(1872)から、伊興一村の鎮守となりました。祭神は、須佐之男命すさのおのみこと・大己貴命おおむなちのみこと・櫛稲田姫命うしなだひめのみことの三柱です。

文化財豆知識 水辺の遺跡 伊興遺跡

渚の宮一帯は、伊興遺跡とよばれる遺跡の範囲内にあります。伊興遺跡は、毛長川の水運を利用して関西方面とも交易していました。遺跡からは、弥生式土器はしき・土師器すえき・須恵器、また、鏡かがみや勾玉まがたま、航海の安全を祈った際に使用した船の模型といった祭祀遺物さいしが出土しています。さらに住居址、井戸跡など生活遺構もたくさん出土しています。こうした遺物は、伊興遺跡展示館に展示されています。



出土した船の模型の復元